

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年九月一日発行(毎月一回一日発行)
第十二巻第五号(通巻第一三十七号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第137号

9. 2005

紋紙

品川 鈴子

ぐろっけ十周年大会

梅雨晴れの宴生駒・茅^ち淳^ぬ・六^む甲^こ望み

たたむ衣に紋紙そよぐ夜の秋

酔芙蓉白き花撒くつむじ風

台風^{たいふう}に雨戸^{あまど}蠟^{ろう}塗^ぬり殴^{なぐ}る蹴^ける



方違へ浄め塩撒く台風圏

野分あとまづ裏鬼門掃きにけり

地下街のおまけ手に手に芒の穂

彼岸だんご大工左官も中休み

悼 賀山秀子様

組紐の指を絡めし曼珠沙華

紐編みし指を定印彼岸花



玉 鈴

兵庫 堀井乃武子

夏座布団つかへつかへの経を聞く
部戸の開け放たれて夏旺ん
家々の孫が出来てきて溝浚へ
母さんは疲れましたと昼寝中
冷房車眠りこけたる中学生

香川 松井 洋子

朴咲くや兄は最初の好敵手
万緑や子離れし手の厚きまま
水平線尋ね卯の花峠越ゆ
曇天に撥ね返す白おほでまり
夕河鹿生業めきて鳴き通す

愛媛 松本 恒子

水軍の割れたる茶臼古茶渋き
鯉幟漁船に影の大あばれ
風光る島の灯台掴めそう
死ぬるもの飼はずときめし金魚玉
落し文天の夫なら拾はねば

吟

愛媛 三浦如水

沸き上がりパントマイムの雲の峯
島に来て良き声流す金魚売り
サラリーマン昼寝の足を椅子に投げ
岩に立ち瀬に立ち鮎の解禁待つ
眼で叱り鶏を励まする老鶏匠

愛媛 三浦 澄江

露を食むほろほろ苦き青春期
竹落葉働き抜きし漢の背
饒舌に誇張もありて青葉冷え
駐在所何時も留守なり金魚鉢

兵庫 三枝邦光

バスに観る寅さん映画迎へ梅雨
花しようぶ恋の小舟を留めをり
梅雨ぐもり蹴上疎水の匂ふ午後
朽ち舟を景の一つに菖蒲園
梅雨空へトランペットの響く夕

兵庫 水野範子

船頭のおけさ浸み込む夏柳
老鶯無縁になりし針と糸
鮎種は水槽泳ぐ星鱒
黒ずみし破れ菅笠は芭蕉のもの

香川 三橋 早苗

青鷺の冠羽誇らしげに靡く
打ちし蚊と喰はれし痕の数合はず
夏帯の仕立てあがるを待ち遠し
曾祖母の単衣まとひて独り言
強風に足を踏ん張る子かまきり

和歌山 宮原利代

天道虫翅をたためば星揃ふ
たつぷりと日焼止め塗り遍路発つ
薫風や産湯に拳緩みたる
根来寺どこまで寺領樟若葉
飾られて昼は舫いの鵜飼舟

茨城 三輪 慶子

山巡る各駅停車藤の花
妙高の雪溪近しスイッチバック
水面には逆さ妙高三つ柏
黒姫山一茶の里の九輪草
薪能とんびは高く鳴き渡る

愛媛 村上 和子

新茶注ぎ披講に移る小句会
藍柄の器揃へて夏館
痛む齒に茅花流しの風滲みる
空海が又の名授け弘法麦
釣部下げて草庵梅雨に入る

大阪 師岡 洋子

陀羅尼助商ふ軒に燕の子
更衣せねばと母の独り言
荷こぼれて跳ねる小魚梅雨の入り
花莫蔭に立たせて合はす子の着丈
生き死にの話を少し夕端居

薬草歳時記

(一三六) トウガラシ (蕃椒)
牛尾曜子

唐辛子一糸まとはず熟れにけり 田川飛旅子

熱帯アメリカ原産、ナス科の一年草で、名前の由来は、唐辛子「外来の」、「味が辛い」、子は「果実や種子」を意味します。生薬名は「蕃椒」です。

伝来は、コロンプスが一四九三年にスペインへ持ち帰り、日本へはシルクロードを通じて、中国から来たのであろうと思われています。現在世界中の国で多く使われ、ヨーロッパでは、胡椒に代わる香辛料として広まり、十六世紀にはインドにも伝来し、一般に「カレー」と呼ばれる多種の料理にも用いられています。

主な成分は、体内脂肪を減らす事で近年有名になった、辛味成分のカプサイシンとビタミンA源のカロチノイド、そしてビタミンCも豊富に含まれています。

薬理効果として、果実を浸剤(細かく切って、熱湯を注ぎ、薬用成分をにじみ出させた薬剤)、或は、アルコールで抽出した液(トウガラシチンキ)を塗布又は湿布すると、

肩こり、五十肩、腰痛、関節リウマチ、痛風、肋間神経痛、膀胱炎、フケ、脱毛、のどの炎症、しもやけに効果があります。

粉末にして一日0.3g、0.1gを服用すると、辛味性健胃剤として、消化不良、食欲不振、浮腫(むくみ)に効き、コレラ菌に対して抗菌性があるとして、昔は珍重され、蚊が嫌うので防虫剤として入れる事もあります。

日本では、米びつの中に果実を入れて防虫効果を期待します。お隣の韓国で、トウガラシ文化が開いたのはトウガラシが伝わる以前から、日常的にキキョウの根(トラジ)を食べる習慣があり、トウガラシと併用する事で有害な作用を解消し、有効な作用だけを活かすことが出来たからです。アメリカ産の香辛料、タバスコ(商標)は赤唐辛子をソース状にしたもので、日本では主にスパゲッティやピザに使われていますが、何にでも好みにで振りかけて食すると、ビタミンCやカプサイシンが効いて、美容効果もあり味も良とする「マイソース派」の一人が私で、娘婿が直径5cm、高さ15cmの特大ピンをプレゼントしてくれた時は、啞然としながらも、順調な中身の減り具合に納得しながら楽しんでる昨今です。

参考文献「薬草」山と溪谷社、「薬用植物学」南江堂

「生活」よみ講談社、「身近な薬草」婦人生活社

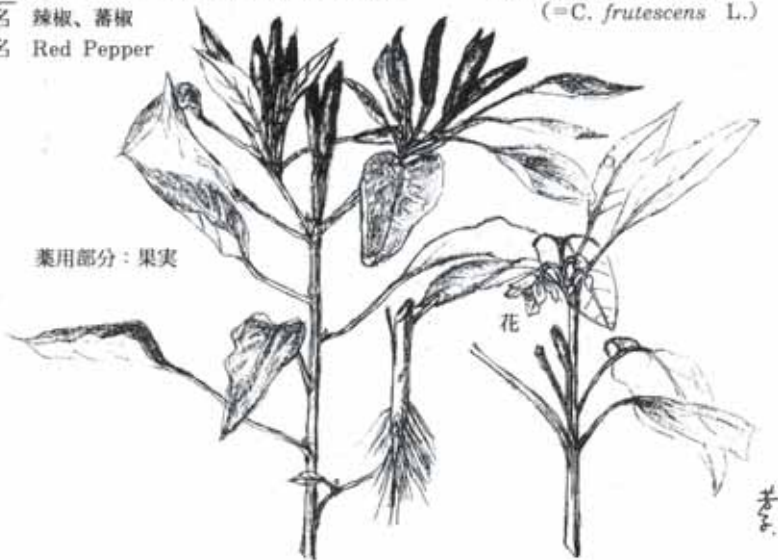
「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

著者略歴 神戸薬科大学卒 薬剤師

唐辛子 (トウガラシ) [トウガラシ属] (なす科)

Capsicum annum L.
(=*C. frutescens* L.)

漢名 辣椒、蕃椒
英名 Red Pepper



中田芳子画

うつくしや野分の後のたうがらし	与謝 蕪村
とり入るる夕の色や唐辛子	高浜 虚子
誰も来ないととうがらし赤うなる	種田山頭火
戸袋の節にかけあり唐辛	原 石鼎
今日も干す昨日の色の唐辛子	林 翔
みすずかる信濃のいろに唐辛子	神蔵 器
乾びゆくものに土蔵と唐辛子	廣瀬 直人
流民となりて舌焼く唐辛子	鍵和田 柚子
鷹の爪ブローチとして貰ひけり	北畠 明子
摘みとればルアーにしたき唐辛子	塩出 眞一

くろくけ

鈴の奏

品川 鈴子 選

糸柳あのねあのねに耳を貸し 北海道 森 早和世

水無月やひとに会ふため躑抜く

海峡を越えむ白靴みがきをり

札幌へ降りる序でのリラの花

「ピアスつけ早乙女赤き田植機に 兵庫 鈴木 愛子

「香炉峰」を見るにあらねど簾巻く

母の気配する終の間の青簾

青簾灯し透く闇黄泉めきて

つくしんぼ亡き妹の分も摘み 愛媛 高橋 英子

少年の眼差しとなり麦笛吹く

玉葱を吊して風の深庇

男衆も姉さん被り茶摘唄

客去りてはしゃがずなりし夕風鈴 兵庫 津田 霧笛

そよ風がめくる平積ひらつみ五月号

吟行へ履き慣れし靴風光る

青芝に体あずけて匂と遊ぶ

潮風を受けて著莪の葉黄ばみたる 兵庫 山口 庸子

もこもこと山脈やまなみ覆ふ椎の花

白蛇のもつれ合ふさま数読めず

白蛇の寢覚めよろしき舌ちよろり

縛られし雪舟（総社市宝福寺）像や若葉冷 大阪 今谷 脩

片蔭に石碑いしがみ太し飛鳥寺

ガードマン佇むそばに立葵

咸臨丸の水夫の裔なり土用波

区の花はゼラニウムとや手渡され 兵庫 後藤 洋子

明け易にいるはずのなき鶏の声

モンローと同じ産まれ日花南瓜

沙羅の花囀ひのありて近づけず

梅酒漬け十年先を封印し 兵庫 森山八重子

ネクタイの踵をはずして夏衣

日焼けして肩をいからす坊主刈り

馬乗りの子にあやつられ父の日よ

物干しでこつこつおどおど雀の子 大阪 沖野 貞子

急逝の知らせ春雷家揺らす

秀 鈴 記

巻頭三句 品川鈴子 評

四句、十五句 中田寿子 "

* 選句は全て 品川鈴子

海峡を越えむ白靴みがきをり 森 早和世

海峡を渡ろうと決めた。これは今までとは違う別の世界へ移ること、そこではどんな出会いがあるのやら、計り知れない前途への、期待と不安で一杯の筈。

じっとして居れない昂ぶりを紛らすには、きれいな白靴を磨いて、白紙の状態で出発する他にない。眩しい様な一歩を踏み出すのですから。

母の気配する終の間の青簾 鈴木愛子

亡くなった母が最期まで起臥した部屋には、肉親の勤と
いっべきか、ひそかに母親の心がのこっているよつな気配。
ふと青い簾越しに眺めると、現世と冥界を行き来出来そう
に感じる。籠もっている慕情の通路なのかも知れない。

男衆も姉さん被り茶摘唄 高橋 英子

「おとこし」とも呼ばれた召使の男達は、同じ立場の茶摘で忙しい女性への手助けを惜しまず、目立たぬように手拭を目深にかぶった。

姉さん被りは手拭の中央を額に当て、左右の端は角を立てて後ろに回して折り返すだけで、便利な美しい日除けの被り物。

吟行へ履き慣れし靴風光る 津田 霧笛

吟行にはリュックにスニーカー、片手に句帳と支度は完璧、四方八方向材を見付けようと努力します。爽やかな風の中を歩き良い句が得られました。

潮風を受けて著我の葉黄ばみたる 山口 庸子

マングローブの林では集中して塩分を取り込む葉があり、黄色に変わって落とし他の葉を守っていると教わりま

した。先年の台風の折も潮風を真面に受けた街路樹の惨めな姿が放映されていました。著我も同じだったのでしょうか。

縛られし雪舟像や若葉冷

今谷 脩

ました。各自が涼しく夏を過ごす工夫を考えたいものです。この夏にびつたりの一句。

物干しでこつこつおどおど雀の子

沖野 貞子

「画僧雪舟といえは「涙の鼠絵」の伝説が有名です。小僧の雪舟が縛られたのは、どの季節かは知りませんが、若葉冷の頃の通称雪舟寺での一句と推察しました。

モンローと同じ産まれ日花南瓜

後藤 洋子

モンローといえは風に煽られたスカートを押さえ、唇を少しつき出したセクシーな写真をどなたでも思い出すことでしょう。彼女が夏生まれとは知りませんが、そういえば南瓜の花、モンローばいず。

泣き笑ひ忌日も過ぎし葱坊主

中川美代子

想い出に浸っていた、長くもあり短くも感じた喪中も過ぎ外に向けてやつと気持が動いたのでしょうか。葱坊主は種を残す為、毅然と立っています。亡き人もこの世に何かを必ず残してくれています。葱坊主の様に。(以下略)

ネクタイの箍をはずして夏衣

森山八重子

地球温暖化防止の為、この夏は小泉総理もさかんにクー ルビズを唱え、自らネクタイをはずして記者会見に臨まれ